

長谷川慶太郎著「必ず復興する日本のシナリオ」ポプラ社 2011年6月30日刊を読む

## 必ず復興する日本のシナリオ

1. 2011年3月11日。この日は、日本はおろか、世界中で忘れられない数字としてインプットされるだろう。三陸沖で発生したマグニチュード9.0の大地震、それ以上に壊滅的な被害を与えた黒く巨大な津波、追い打ちをかけるように勃発した副島第1、第2原子力発電所の惨劇——連鎖した未曾有の大災害は、経済停滞するこの国を一気に土俵際まで追い詰めるかのように、大打撃を与えた。当然のように、人々は冷静ではいられない。飛び交うデマや風評被害、不足する食料品に混乱を極めた電力事情。乱れた鉄道ダイヤは首都東京を一時マヒ状態に陥らせた。国難とも称される一大危機に直面する日本の一挙手一投足を、世界中が固唾を呑んで見守っている。
2. しかし、心配はいらない。日本は必ず復興する、いや、以前よりも強い姿に生まれ変わるだろう。第一、歴史を掘り起こせば、日本という国は敗戦後の超混乱期ですら乗り越えて、その後に見事な高度経済成長を遂げたのだ。筆者も10代の時に経験したが、それはすさまじい時代だった。深刻なモノ不足は今回の比ではなく、焼け野原の中でアメリカ軍の施設にだけ電灯が灯されていた風景は敗戦国そのものだった。しかし、その後社会は大きく変貌し、日本人の勤勉さとも相まって、大国への道を自力で切り開いていったのだ。その時、日本人が持っていた希望や精神力、一致団結する力は、時代を超えて今こそ発揮されるべきであろう。
3. 3.11は凶らずも、世界の思惑を浮かび上がらせた。今回の震災で見えてきた各国の動きが実に興味深いのである。
4. たとえばアメリカだ。震災から3日後の14日には、海軍の原子力空母ロナルド・レーガンが三陸海岸沖に到着していた。いくらなんでも、早すぎると思わないだろうか？
5. 実はこれには理由がある。のちほど詳しく述べることにしよう。
6. 原子力大国のフランスにしてもそうだ。福島原発が危ないと見るやいなや、世界最大の原発会社アレバはおろか、サルコジ大統領自らが飛んできて、東京電力の国有化を示唆していた菅首相を一喝した。これには原子力大国としての意地と、推進計画を揺るがすことはできないという確固とした意志を感じる。
7. また、一番大規模な医療チームを送り込んでいたのはイスラエルである。その数なんと62人。なぜなら、自国の先端産業のためには、東北地方の復興が欠かせないからだ。
8. 周知の通り、ゼネラル・モーターズ(GM)やアップルをはじめとした世界的メーカーに、被災地の町工場から部品供給が行われていた。諸外国が全力を挙げて復興に尽くす理由はここにある。発生から1カ月の時点で復興に名乗りを上げた国は136カ国。これは日本だけの災害ではない、地球規模の大問題なのだ。

- 9 . 逆に中国には、有事の際の日本の誠実で確実な対応を見せつけ、驚嘆させることとなった。それは大量に送り込まれている労働者の迅速な送還に表れたのだ。この国は 2008 年の四川大地震の被害に今も苦しんでいる。復興が進まず、3 年経った今でも、まだ多くの避難民は仮設住宅から出ることができない。
- 10 . 一方、日本の復旧作業は、正確かつ迅速だ。たとえば、千葉県市原市のコスモ石油のコンビナートが爆発するなど、東日本に 9 つある製油所のうち 6 カ所が一時的に操業停止する事態となった。しかし、1 カ月後の時点で、すでに生産供給体制は震災前の水準まで戻りつつある。これは石油だけでなく、道路、水道、電力など、すべての復旧作業に通じていることだ。世界一と評される日本の技術力を駆使すれば、早期の立ち直りは間違いないといえる。
- 11 . それを象徴する問題として、震災直後に社会を混乱させた計画停電も、今後は回避される可能性が高いだろう。地震発生後、東京電力は 14 基ある火力発電所にすぐ再稼働の指令を出した。そのための天然ガスも確保している。さらに、世界最大の揚水発電「<sup>かながわ</sup>神流川発電所」をはじめ、多くの大型揚水発電所を持っており、原発で失われた電力はすぐに補完できるのだ。計画停電はそれまでの時間稼ぎにしかすぎない。
- 12 . そして、それだけではない。電力危機を乗り越えるには、国民一人ひとりの力が実に大きい。ひとたび電力の供給不足が報じられれば、みな節電や省エネなどの行動を実行する。
- 13 . 震災が発生したのは 3 月の上旬。東日本では、まだまだ寒い日が続いている時期だ。にもかかわらず、被災地の様子を目にしてエアコンのスイッチを切った人も多いのではないだろうか。そのように遠く離れた場所の悲劇にも自分の意識を深く持ち、傷ついた仲間の<sup>おもんばか</sup>心中を察し、慮ることができるのは、世界中で日本人だけだ。そんな我々の国民性が、結局は、東日本大震災という悪夢のような出来事をも凌駕すると信じている。
- 14 . だから、何の心配もいらない。自信を持って、堂々と立ち向かえばいい。今までと同じように生活することが、やがては日本の新しい扉を開いてくれる。そこで試されているのは、一人ひとりの行動と意識、そして純粋な「力」だ。そして、我々は間違いなくそれを持っている。だから、立ち上がれるのだ。ピンチはチャンスの名の通り、日本はまた一つ、世界を驚かすことができると確信している。日本復興のシナリオ、その第 1 幕はすでに上がっているのだ。

P2 ~ 7

#### [コメント]

日本復興の具体策をポジティブに説明して下さる長谷川先生の先見性に敬意を表したい。

- 2011 年 7 月 13 日 林 明夫記 -